

「はい、お茶のおかわり。ケーキも……」

「自分で食べる」

日向は言いつと、柗の手からフォークを奪い取る。

「新婚さんみたいで、よかったのに」

すねる柗を冷ややかに見やつて、日向はケーキにフォークを突き立てた。

「ああ、せっかくのデコレーションが台無しだな。せめて、切り分けたらどうだ？」

「えー、ひなが言っただよ？ クリスマスケーキをホールで食べたいって」

「いつの話だよ」

小学生かそこらの戯言を、今頃持ち出されても困る。

「まあ、このくらいなら、余裕だけだな。ほら、おまえも食べろよ」

日向がフォークで掬ったケーキを柗の口元に差し出すと、一瞬驚いたように瞳を見開くが、すぐにうっとりとした表情で口を開いた。

「んー。最高！ ひなに食べさせてもらえるなんて、僕の人生、ここで終わっていいよ」

「ばか。こんなことくらいで、終わるな」

「え？」

柗は瞳を輝かせると、二人を隔っているこたつの角ぎりぎりまで、身体を寄せてくる。「それって、もっといいことがあるって意味？」

「誰もそんなことは言っていない」

「いや。今の台詞は、そういう意味だよ」

柊は決めつけると、日向のフォークを取り上げて、ケーキ台の上に置いた。

「な、なんだよ？」

「こたつの角越しに両手首をつかまえられて、日向はあせる。」

「僕をもっと最高の気分になさせてくれるんだろっ？」

いつものしおらしきはとこへやったのか、柊は、甘ったるい声でささやくと、毛足の長い白いムートンの上に、日向を強引に押し倒した。

「ひな、キスしていい？」

「だめに決まって」

「じゃあ、いいんだ？ ひなは、嘘つきだから」

柊は微笑むと、日向の両腕を強い力でムートンの敷き物に押しつけながら、覆いかぶさるように唇を重ねてきた。

「……柊っ」

軽くついばまれたあと、すぐに唇を離そうとした日向だったが、それはまだ、ただの味

見とばかりに、柊は口元を押しあててくる。

「ん、ぶっ」

あたたかな乾いたぬくもりが唇をこする感触に、下腹が痛いほどに疼く。

この感じは、初めてではない。

日向もよく知っているものだ。

夜中に、頭上のロフトで眠っている柊が寝静まったのを確認して、一人で股間をもてあそぶときに感じるのと同じ、あの感覚。

「あっ」

唇を割ってもぐりこんでくる柊のエロティックな舌の動きに身悶えながら、日向は、身をよじるふりをして、二人のあいだにあるこたつの足に、下腹をすり寄せる。

それでどっにか、せりあがってくる危険な欲望をやり過ごそうとした日向だったが……。

「ひな……」

柊が唇を浮かせて、とろけそうな声で自分の名前を呼ぶのを聞いて、張りつめていた身体

の力が一気に抜ける。

薄く目を開くと、柊の顔が、すぐ目の前にあった。

(綺麗だ、柊)

見慣れすぎているせいで普段は特に意識もしていないが、おはあさまがチヨコレートの

本場ベルギーの貴族の出だからか、柊はひどく整った容姿をしている。

近くの女子校でも、だんとつでトップの人氣で、お菓子/materialを買出しに行く際にも、

出待ちの女の子たちがすごいと、クラスの誰かが話しているのを聞いたことがある。

(なのに、なぜ俺なんかに……)

幼馴染みとはいえ、所詮は男同士だ。

たとえ子供の頃のおままごと遊びの延長で夫婦ごっこはしていても、こんな淫らなキスをしていいはずがない。

そう思うと、柗の心地いい唇にこれ以上触れてはいけないう気がして、日向は、覆いかぶさっているそろいの黒いタートルネックのセーターの胸を押しした。

「ひな？」

「いい加減にしる。俺を女の子の代わりにするくらい飢えてるのなら、誰かいい子を見つけて、つき合えばいいじゃないか」

「代わり？ それ、本気で言ってるの？」

怒ったように顔を離して、柗が眉を寄せる。

「僕は、ひな以外の誰にも、こんなことする気はないよ」

「ばかばかしい。いい加減現実を見ろよ。俺たちはもう高校生だぜ。あと数年も経てば、それぞれ別の相手と家庭を持って……」

「いやだ。僕は、ひなのお嫁さんになるって、昔から言ってるじゃないか。ちゃんと予約済みなんだからな。ほかの誰にも、絶対ひなは渡さない」

断言する柗の顔を、日向は平手で押しつけた。

「男の嫁なんてごめん。俺よりデカいし」

「それなら、ひなが僕のお嫁さんになればいい」

「え……？」

思わず訊き返す日向の唇を、前よりも深く柗がぶさへ。

「んんうっ」

もがいても、上からのしかかっている柗の身体は、ビクともしない。

両手のこぶしで、ぼかぼかと叩くと、柗が少しだけ身体をずらした。

ホツとしたのも束の間、ウエストのあたりに伸びてきた柗の手が、いきなりセーターの中にもぐりこんでくる。

「な、なにを？」

「さあ？」

柗は冷ややかに受け流すと、日向がセーターの下に着ているカットソーの薄い布越しに、胸のあたりを探った。

「……あっ」

柗の長い指の先が、胸の突起をこすった瞬間、日向は思わず声をあげる。

「感じるんだ？」

「べ、別に」

「嘘ばっかり。僕、知ってるんだ。ひなが一人エッチのとき、ここをいじって、はあはあ言ってるの」

耳元で柘は、クスツと意地悪な笑いを洩らす。

「嘘だ」

耳まで真っ赤になって、日向は言い返した。

「そんな恥ずかしいこと、やってない」

「やってるよ。もしかして、夢中すぎて、自分でも気づいてなかったりして」

柘は言いつつ、日向の耳を、入るりと舐めた。

びくりと身をすくめる日向を、一度きゅっと抱きしめると、セーターとカットソーを、胸の上まで、まとめてめくりあげる。

「やっ」

小さく悲鳴をあげる日向の唇をキスでふさぐと、あらわになったその胸元を、柘は、てのひらでまぎれさせた。

「ひあっ」

敏感な先端をこすられて、日向は、甘い声を響かせてしまう。

「ほらね、ここ、いじられるの好きなんだらうっ」

柘は嬉しそうに指をすべらせて、すでにツンと尖っている日向の胸の突起を、きゅっとつまみあげた。

「あ、んっ」

日向は、びくんとおのけぞる。

「柘、だめだ。こんなこと……」

「どっして？ ひなに気持ちよくなってほしいんだ。プレゼントが僕じゃ、いやっ」

欲望してすっかり硬くなった日向の乳首を、指先で器用にくりくりといじりながら、柘は甘ったるい声で訊く。

「気持ちよくなんかっ」

「ないわけないよね？ こんなに感じてるくせに……」

柘の手が、ゆるやかにすべり下りて、脇腹を撫でる。

「ん……っ」

「ほら、ここも……。もうこんなになってる」

フェイントのよつに、ふいに股間をさすひかれて、日向は息を詰めた。

「気持ちよくなきゃ、こんなふうにはならないよねっ」

「……」

なにも言い返せずに、日向は顔をそむける。

「もっと気持ちよ〜くしてほしい?」
返事がないのは「承のしるし」とばかりに、柊は身を起す。

「こたつ、邪魔だな」

うっとうしげにつぶやきながら、柊はこたつを押しつけると、日向をふたたび組み敷いて、あらわな胸の突起に唇を押し当てた。

「んー」

舌でこねまわして、ちゅっと吸う。

「あ、やっ」

日向は、柊が体勢を変えざる隙に逃げなかったことを後悔した。

(なんだよ、これ……)

濡れた熱っぽい舌で乳首を愛撫されるよ、あまりの気持ちよ〜いよ、頭がくらくらする。

「そんなにいいの? ひな、可愛い……」

甘くかすれた柊の声に、怖いくらいに感じてしまっ。

吐息でなぶられ、じかに舌で舐めまわされ、日向はびくびくと身体を震わせた。

「んっ、んっ」

甘えてねだるような喘ぎが、自分の声だと気づいて、日向はうろたえる。

「いやだ、柊。おまえ、いつもと違う」

「そっ? 気づかなかった? 僕はいつだって、心の中では ひなのこと、こんなふうに

いじめて喜んでただけだよ」

「そんなこと、わかるかよっ」

裏切られた気がして、日向は涙声で怒鳴る。

いつも大切にしてくれる柊が、こんなことを考えていたなんて……。

けれども、悔しさや哀しさよりも、柊のくれる快感のほうが大きくて、胸もとで淫らに動いているその頭を抱きしめてしまっ。

「あ、はあっ、ああっ」

気がつくよ、日向は自分から、柊の唇に胸を押し当てて、快感を奪い取っていた。

「欲張りだな、ひなは。そんなにがっつかなくても、たっぷり気持ちいいことしてあげるから」

苦笑を湛らしながら唇を浮かせて、柊はひなをよ〜く。

「……っ」

柊のてのひらが、ジーンズの股間を優しくさするのを感じて、日向は身をすくめた。

「いい子だから、少しだけじっとして」

日向をなだめるように声をひそめて、柊は身体を起す。

そして、柊は日向の腰を両手で撫でまわすと、手早くジーンズを抜き取ってしまった。

「なぜ脱がすんだよ?」
簡単に服を剥ぎ取られたのが、子供扱いされたみたいで悔しくて、肘で上半身を起こしながら、日向は怒った声で、柗を責める。

「汚しちゃうと困るから」
澄ました顔で柗は答えると、中央がふくらんでいる日向のグレーの下着に顔を寄せた。
「はあっ……と熱い吐息を吹きかけられ、柗は眉を寄せる。

「おい。なにをしている?」

「一人エッチでは、できないこと」

柗はささやいて、日向のふくらみに、そっと唇を押し当てて。

「あっ……」

まるで感電したみたいに、甘い痺れがそこから身体を突き抜けて、日向は悲鳴をあげた。
「ね?ここにキスなんて、自分ではできないだろう?」

「と、当然だ。というか、そんなこと、誰も考えたりしない」

「それは、ひながまだ子供だから。僕なんていつもひなに、僕のを啜えて、いやらしく舐めてほしいと思ってるよ?」

開き直ったように柗は言つと、日向が呆然としている隙に、下着を足の付け根のあたりまで、ひきずりおろしてしまふ。

「な……」

ぶるんと飛び出してきたピンク色の肉茎を、とめるまもなく柗の唇に啜えこまれて、日向は真っ赤になった。

「やめろ、汚いっ」

「大丈夫。綺麗だよ、ひなのこ」

自分の股間から引き剥がそうとする日向の手を軽くはらいのけながら、柗はつぶやく。
「思っていたとおり、美人に育ったね」

唇で、日向のものを愛撫しながら、柗はうっとりときなはれちかく。

感じやすい先端を、柗のあたたかな唇にくちゅくちゅと濡らされて、これまで経験したことのない激しい快感のせいで、日向は声も出せない。

「ひな……」

「あ、いやあっ」

とつくに蜜をしたたらせているまるい先端に優しくくちゅくちゅけられて、日向は激しく身悶える。

「柗、もうだめ……っ」